

# 日本畜産学会北海道支部の歴史

日本畜産学会北海道支部会報第22号

## 日本畜産学会北海道支部設立前後の追憶

広瀬可恒

### まえがき

去る4月に36年間お世話になった北大農学部を大過なく退職し、身の書類整理に、歩んできた時代を追想して、独り感慨にふけていた折しも、本支部会の常任幹事さんより、北海道支部設立当時の経緯などの寄稿を依頼され、当時先本先生と共に幹事役をつとめてきた関係で、一応の責務をも感じ執筆をお引受けした次第である。しかし筆をとって見ると、意外と記憶が薄れている処が多く、また強く印象に残っている事柄は、活字に残すことに差し障りを感じたりして、所詮凡庸なクロニクルになってしまわざるを得ないことをお許し願ひ度い。また誰にでも出来ることではあるが、この際頼まれついでに、暇のある老人の奉仕の積りで、支部四半世期の年譜を作成してみたので、後学の方々に、今後少しでもお役に立てていただければ幸と存じる次第である。

### 学会受難時代

昭和18年秋に北大農学部畜産学科に奉職した筆者にとって、それ以前の日本畜産学会会員としての学会活動があったわけでないから、当時のことは昭和49年の日本畜産学会報創立50周年記念号巻末に付された日本畜産学会年譜によるほか術がない。それによると大正13年に創立された日本畜産学会は、大正14年春の第1回大会以来、毎春東京において総会および大会を開催してきたが、昭和18年の大会を最後に、戦局が不利となった関係で、昭和19年の農学大会を始め、畜産学会の大会も開催が中止となり、会報の発行も不順となって学会受難の時代を現出した。また終戦直後の両三年は戦禍により、会報発行は中断され、全国大会の開催も見送られたのである。

北大農学部における伝統の札幌農林学会も昭和18年11月の大会および分科会が戦時中の最後のものではあった。

### 学会活動の復活

戦争末期から戦後の混乱期にかけて、生き抜くこと、食べることで精一杯であったわが国社会において、弾圧を受けていた政治活動と共に、学問の自由を取り戻した学会活動の復活は早く、自然科学の分野においてもその例に洩れず、研究交流の場に飢えていただけに集談会、談話会的なものの開催が昭和22年頃から頻繁となってきた。

本道における獣医畜産学分野においては、昭和22年4月に家畜衛生集談会が戦後初めての学術研究発表会として北大で開催された。その際新たに畜産部門と合体した研究発表会へと発展させることが申し合され、第1回の獣医畜産集談会が昭和22年11月4日に北大農学部大講堂で開催され、畜産部門11題、獣医部門6題の研究発表が行われた。

一方日本畜産学会は昭和23年4月18日に戦後初の全国大会を、第19回日本農学大会の一環として東大農学部で開催し、3会場、一般講演47題であった。北大からは、三田村、橋本、前野、村田、広瀬、大谷、森本等の諸氏が出席し、8題の発表を行なっている。

当時の学会出席のための上京を回顧すると、苦笑を禁じ得ない程大変なものであった。札幌-上野間の汽車旅行は、超満員の旅客に加え、30時間位かかったばかりでなく、4食分位の弁当と飯米持参の旅であり、リュックサック姿で連絡船の乗りおりに長蛇の列をつくり、DDT粉霧の洗礼を受けたものである。また明け方に原ノ町の駅あたりで、闇物資の点検があり、荷物を背追って一旦下車を強要され、チェックを受けて列車に戻ると、今度は着席できなくなる等、大変厭な思い出が多い。勿論宿泊はホテル、旅館を利用することは常識的に考えられず、米や食券を持参して親戚、知人宅に泊めて貰うのが、慣しであった。講演プログラムは更紙にガリバン騰写の一枚もので、要旨などは添えられず、演題のみ

びっしり書きこまれた大変お粗末なものであった。図表は勿論チャートで、チャート書きに苦労が多かったせいも、他人様の発表チャートを食い入るように眺めた記憶が蘇返える。

この様な学会が、昭和24、25年の春の大会まで続き、発表題数も昭和24年2会場73題、昭和25年2会場80題と次第に増え、演者の顔ぶれも新制大学の先生方や外地帰還の研究者の方々も加わって、大変賑かとなり、人々の邂逅を欣び合う学会社交場としての意義も大であった。

昭和25年10月に戦後初めての日本畜産学会の秋季大会が、千葉の農業技術研究所(現畜産試験場)で開催され、この大会から活字印刷の講演要旨付きのプログラムが配布された。しかし発表題数は僅か57題にすぎず、特別講演などはなく、一日限りの日程であった。

戦後の復興が急速となり、朝鮮動乱によりわが国経済界に活気が満ち、世相が安定してきて、学会活動が急速に活発化したのは、昭和26年以降のことであった。昭和26年の春は日本農学会が京都に誘致された関係で、畜産学会も京大農学部で開かれ、開催日も5月6、7日の2日間となり、1会場103題の発表が行なわれ、大変な盛会であった。この頃から開催当番校が簡易な宿泊施設を参会者のために斡旋するようになり、この時は百万遍のお寺に宿泊した記憶が鮮明に蘇がえる。襖を隔てた隣室が畜試グループであったり、東北大グループであったりして、夜には各部屋の交流が活発に行なはれたのみならず、研究分野を同じくする顔ぶれが相集って、研究グループの集会を学会時に持つような話に進展し、諸々の研究会、懇談会が学会の付随行事として誕生して行く契機となったように思う。一方学会の発表方向として、各地方に畜産学会支部を設けて、当時新たに設けられた農業改良普及員を広く支部会員に勧誘して、研究と農業指導とのパイプをつなぐ必要性が強調せられ、いち早く九州支部が、昭和25年11月に発足、次いで翌26年には関西、北陸、東北の支部が相ついで設立されていた。

昭和26年秋には九大農学部の創立30周年記念の秋季大会が福岡において11月4、5日に開催せられ、この大会から特別講演が計画され、当時の畜産学会副会長の佐々木清綱博士が、「産卵生理に関

する血清学的研究」という講演をなされた。爾来、畜産学会の大会時に特別講演が必ず企画される様になったのである。

この頃から日本の社会経済情勢は落付きを取り戻し、旅行が比較的楽に行なえるようになった関係で、観光旅行を兼ねた地方都市開催の学会が過熱気味となり、このことが新聞に風刺記事として取り上げられたりした。確かに戦時中に育った当時の若い学徒にとって、修学旅行のない学校時代を送っているだけに、学会という名目でもなければ、日本列島の見聞をひろげる機会に恵まれないわけであったから、地方持廻りの秋季大会開催に対する要望が強かったのである。

そのような関係で京都、福岡と地方持廻りを済ませた次は、当然北海道大会の開催要請が強く出されて、昭和27年の秋季大会を北大で引受けざるをえない情勢となった。

ところでこれを受けて立つ受け皿が必要という事も、日本畜産学会北海道支部の設立を促進する要因となったように記憶する。

#### 北海道支部の発足と北大における全国大会の開催

先に北大農学部畜産学科内に設けられた獣医畜産集談会は、昭和23年5月に第2回の集会を行ない、演題32題に加えて故平戸勝七教授による「馬伝染性流産の予防接種に関する研究」と題する特別講演が行われた。この第2回集会から北海道農試畜産部、帯広農業専門学校、北海道登別家畜衛生研究所から出題出席があって、北大に限局された集談会から全道的な研究集会へと発展していった。なおこの年から集談会は春秋2回開催されることとなり、第3回例会は昭和23年10月23日に札幌農林学会の畜産部会の形で開催され、畜産関係の演題6題、獣医関係22題の発表があり、このほかに故松本久喜教授の「家畜の体重遺伝に就て」の特別講演が行われた。

その後も獣医畜産集談会は春秋2回定期的に行われ、会場も昭和25年秋の第7回集会が定山溪玉川荘において、昭和26年6月の第8回例会が帯広畜産大学で開催され、演題も39題を数え、発表者は北大、畜大、北農試、家畜衛試、滝川種羊場、新得

種畜場、共済連衛研、美瑛種鶏場、岩見沢農校と全道の獣医畜産機関を網羅し、内容も多彩となってきた。

昭和26年秋には、札幌農林学会大会の部会として北大農学部で開催され、37題の研究発表があり、プログラムが講演要旨づきの活字印刷物となった。

この大会の終了後、兼て胎動のあった日本畜産学会北海道支部の設立総会が行われ、戦後9回に及んだ獣医畜産集談会は発展的に解散することになったのである。

設立総会において北海道支部細則を制定し、それにもとづいて支部長に北大三田村教授を、副支部長に帯広畜大島倉教授を選定し、顧問に北大島学長、帯広畜大宮脇学長、北海道農試栃内場長、札幌農林学会中島会長、北大名誉教授高松博士を推挙した。なお幹事には次の諸氏が選出された。

今村正男(雪印乳業)、向井羊吉(酪検)、塚本不二雄(道種畜場)、三須幹男(帯広畜大)、松本久喜(北大)、前野正久(北大)、高畑倉彦(北大)、橋本吉雄(北大)、上月操一(北大)、持田勇(北海道庁)

常任幹事: 庶務担当、広瀬可恒(北大)、会計担当、先本勇吉(北大)

昭和26年12月1日に第1回の幹事会を開き、会員募集について協議し、道内の大学、試験研究機関、畜産関係場所ならびに会社、団体、および農業改良普及員に広く入会の公募を行なう事となったが、昭和27年11月の第1回総会時には会員数151名を数えたのである。

第1回の講演会は昭和27年6月21日に北海道農業試験場畜産部に於て開催され、一般講演25題に加え、島倉副会長による特別講演「乳牛種牡検定の組織について」が行われ、参加者80名におよぶ盛会であった。

なお、当時の年会費は100円で、賛助会員制度はなかったのである。

昭和27年6月の幹事会において、昭和27年度の日本畜産学会秋季大会を北大農学部で開催するに当たっての準備委員会を結成し、これを中心に北海道庁をはじめ畜産関係会社、農業諸団体等の協賛を仰ぐこととし、約20万円の募金を行なった。

そして北海道へ誘致の日畜秋季大会は、昭和27年

9月8、9日の両日にわたって北大農学部大講堂を会場に開催され、一般講演75題と、九大丹下正治教授による「畜産学、特に家畜繁殖学近年の進歩」と題する特別講演が行われ、参加者は道内外より約200名を数え、頗る盛会であった。

初日の講演会終了後、北大付属第二農場の前庭において懇親会を行ない、当時としては走りであったジギスカン鍋と農場産のトウモロコシ、馬鈴薯という野趣横溢の野外パーティーは、懸念された時雨にも見舞われず、流石は北海道と大好評であった。学会終了の翌10日は苫小牧で開催中の北海道ホルスタイン共進会を視察し、支笏湖畔で宿泊、翌日札幌解散というエクスカージョンを行なったが、大杉先生に支笏湖畔の宿の設営係を煩わらし、おえらい先生方の部屋割等で大変御苦勞をおかけした記憶もあらたである。

#### 北海道支部の変遷

北海道支部会は設立以降7年間にわたり、正会員の会費のみで運営して来たのである。

幸い設立当初、故北大名誉教授橋本左五郎博士の追善寄附金30,000円が寄せられ、また昭和27年度日本畜産学会札幌大会準備委員会より大会終了後、協賛余剰金59,545円の寄附があり、これが支部運営の基金にあてられたのであるが、先本会計幹事の御尽力により、会費の値上げを行なっても、寄附金の主旨を体して基金を取りくずし使用することには、一切応じず、会の健全財政を堅持されたことは、特筆に値するところである。

昭和28年以降における本支部会の歩んだ道は、別添の年譜で御理解いただけたところと思うので、主要な変遷や行事のみ記すにとどめたい。

支部発足以来の幹事会制を昭和30年改廃して、新たに評議員会制をしき、会の運営をはかることとし、また昭和33年の支部細則変更で支部構成員に新たに名誉会員と賛助会員を加え、現在の体制が整えられた。学会活動をはかる尺度の一つとして会員数が挙げられるが、本支部会員数は昭和30年220名、昭和40年283名、昭和50年368名と逐年増加し、支部の着実な発展を物語っており、御同慶にたえない。

講演会の開催は、昭和33年までは春秋2回であ

ったが、昭和34年以降は年1回の大会開催とあらためられ、講演要旨を主体とし、支部会務報告、会員名簿を付した日本畜産学会北海道支部会報第1号が昭和33年11月に発行され、爾来毎年大会前に会報が発行されてきている。

日本畜産学会の第55回大会が昭和43年8月31日、9月1日の両日にわたり、帯広畜産大学において大原久友博士を大会委員長として開催せられ、同総会において日本畜産学会長および北海道支部長の連名で、本支部初代支部長三田村健太郎博士、西独ギーセン大学教授クリューガー博士（元北大農学

部講師）、および元北海道畜産課長沢潤一氏に感謝状並びに記念品の贈呈が行われた。

また日本畜産学会第67回大会が、昭和52年9月1、2日に25年振りに北大農学部において先本勇吉博士を大会委員長として開催されたことは、記憶に新たなところである。

戦後30有余年間に遂げた本道畜産業の発達は括目に価するものがあるが、その推進役として本支部の学会活動が大きく貢献してきたことを会員各位と共に認識を新たにし、向後本支部の益々の発展を祈念するものである。